

Title	小特集：高橋誠一郎の経済学
Sub Title	序 Preface
Author	柳沢, 遊(Yanagisawa, Asobu)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2010
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.102, No.4 (2010. 1) ,p.635(1)- 636(2)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小特集：高橋誠一郎の経済学
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20100101-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小特集：高橋誠一郎の経済学

1884 年に新潟県に生まれた高橋誠一郎は、1909 年に慶應義塾大学部予科教員、1914 年大学部理財科教授に就任し、1944 年まで務めた。高橋は、戦後も文部大臣、学士院会員、交詢社理事長など、多くの重要な役職を歴任した。専門の経済書の収集家としても、また浮世絵のコレクターとしてもよく知られていること、これまた言を俟たない。かつて慶應義塾経済学部の機関誌であった本誌『三田学会雑誌』は、高橋が初代会長に就任した 1936 年から経済学会がその公刊母体となった（『三田評論』826 号、154 頁）。これは本特集に関連して記憶さるべきことである。生誕 125 周年となる今年、慶應義塾では、高橋誠一郎に関わる様々な催事が実施されたが、本誌では、とりわけ「重商主義」経済学説の先駆的研究者としての高橋誠一郎に焦点をあて、我が国における経済学説史研究の歩みのなかに、高橋誠一郎の研究を位置づけるための小特集を企画した。近代日本の知的営為が、諸外国の社会科学の影響をうけつつ新しい学問を産み落とし、それがやがて、経済理論・経済政策論・経済史・経済思想史・経済学説史といった諸学に分岐していく過渡期の時代に、新しい社会科学開拓者の先頭に立っていたのが、慶應義塾の高橋誠一郎であった。高橋の教育を受けた多くの学徒が、第二次世界大戦後の慶應義塾大学経済学部の教員として、その学問を担っていったことも忘れてはならない。現実の経済・社会と学問としての経済学の「有効性」との関係が深く問い直されている今日にあって、特定の時代に生きる人間の経済学的認識およびその経済学的認識の変遷それ自体の客観化のための方法論を彫逐しようと苦闘を重ねていた高橋誠一郎の学問を再検討することは、21 世紀の社会科学の再活性化にとって示唆的な作業といえよう。

以下、本号小特集所収の論文について簡単に紹介したい。飯田裕康「経済学史研究者としての高橋誠一郎」は、「歴史主義的方法の経済学への導入」と「帰納主義的論理と演繹的論理の対峙」の 2 つの問題に直面しながら経済学史の体系的構築に向う高橋誠一郎の歩みを振り返る。飯田は、1920 年代から 30 年代前半にかけて開花・深化を示した高橋誠一郎の「重商主義」経済思想は、「重商主義という枠を超えて対象とされている時代の思想像の総体をこそ開示するもの」であり、「重商主義と統治、経済思想と政治思想とのかかわりが、重商主義を織り上げる糸のひとつとして重要な役割を果たしている」と評価する。

大倉正雄「高橋誠一郎の重商主義論」は、高橋の著作『重商主義経済学説研究』の内容および方

法的特徴をその理論的限界を含めて詳細に考察し、同書が影響を与えた同時代の諸研究に言及している。大倉は、高橋の上記『重商主義』の意義を、「重商主義期の学説・思想を広範囲に及んで詳細に記述した浩瀚な書物である」としている。

丸山徹「ダヴァンツァーティの貨幣論」は、モノの価格が、人間の欲望や必要の強さに応じて定まると論じたベルナルド・ダヴァンツァーティの貨幣論（『貨幣論講義』）の内容を紹介し、「漸く実業人をはじめとする俗界の論客たちが経済問題に活発な発言の機会をもとめ始めた時代」としての16世紀の価値学説の代表作とみなしている。丸山の論稿は、「経済学前史」にこだわった高橋誠一郎の研究の一端を示すものといえよう。

本小特集の企画は、経済学会委員会での発議にもとづくものであり、その具体化にあたっては、経済学部池田幸弘教授の助言を得た。小特集は、高橋誠一郎の巨大な足跡のうち、その経済学説史の内容に関わるものであるが、読者がすすんで『高橋誠一郎経済学史著作集』（全4巻、創文社、1993年）や『三田評論』826号（1982年6月）を手にとられることを期待するものである。

柳 沢 遊
（経済学部教授）